序――関係的平等主義と社会正義論の新展開

阿 部 崇 史

本企画は、森悠一郎著『関係の対等性と平等』(2019・弘文堂) に対する書評論文三本と、著者リプライ論文で構成されている。これらはいずれも、2019年6月1日に開催された書評会(相関社会科学研究会)の成果を踏まえて執筆された。序文では本企画への案内として、森氏の著作が有する学術的意義と、各書評論文の内容とを、簡単に紹介する。

本書は、関係的平等主義という立場から社会正義のオリジナルな構想を提示する好著である。その具体的な意義として、ここでは三つのものを提示したい。第一の意義は、従来の平等主義的正議論が主に経済的分配に焦点を当てていたのに対して、本書による平等主義の構想が、人々による相互行為の対等性にも焦点を当てていることにある。すなわち本書は、分配の平等性と相互行為の対等性との両方に対応しうる、より包括的な平等主義の構想を提示しているのである。第二の意義は、相互行為の対等性に反する不正義の態様として、従属・排除・差別という三つの類型を区別し、それぞれに対する規範的な治癒策を提示していることである。この治癒策の提示は、排除や差別の問題を扱う幅広い社会科学の研究にとって重要な意義を持つとともに、例えば雇用におけるジェンダー不平等など、現実社会の課題に対しても大きな示唆を与える。第三の意義は、関係的平等主義の理論を洗練させたことにある。関係的平等主義の立場は従来、魅力的であるのと同時につかみ所の無い立場でもあった。それに対して本書の議論は、前述した不正義の態様の分節化に加え、潜在能力の充分主義という立場を明確に提示することにも成功している。

本書に対して、三つの書評論文は以下のような議論を提示する。まず宮本論文は、関係的平等主義を支持する立場を共有しつつ、行為と社会構造の区分を重視する観点から本書の議論に疑問を提起する。次に石田論文は、従属・排除・差別という不正な相互行為の三分類を検討した上で、差別を不合理性と結びつける本書の議論に対して異論を唱える。最後に阿部論文は、本書が提示する潜在能力の充分主義が有する魅力を整理した上で、潜在能力の十分性と分配における十分性とが必ずしもリンクしないことを論じる。